

りんごは幹から遠くに落ちない — カルロスとエーリヒのクライバー父子の伝説に満ちた間柄

カルロスと父エーリヒとの間柄を解明することは、私のクライバーの伝記のために調査を行う際、まったく特別な挑戦となった。これについては何十年の歳月を越えて、事実とされることに関して噂や逸話が固まってきた。そうした見解は概ね、むしろよくは考えられずに、信頼できる筋と関係なしに広められるものである。

私は調査の際に権威主義的な、いやそれどころか命令的な父親像という、よく描かれるイメージから出発した。息子への対し方が悪く、息子が音楽家としての生涯を歩むのに猛反対しようとしたとされるイメージである。カルロスの姉がこれを全く別の見方で描写したからと言って、彼女が父や弟と個人的に近い関係にあったことを考慮すれば、一般に広まった見方を否定するには不十分であった。しかしカルロス・クライバーにきわめて親しい友人たちも、父子関係が悪いという印象はほとんど持っていなかった。真相を明らかにしてくれたのは、私が閲覧できた多数の私的な文書、エーリヒ・クライバーが妻ルースに宛てた未公開の手紙、ならびにカルロスと両親との手紙のやり取りであった。その中でエーリヒ・クライバーは、家族が離れ離れであることに悩み、妻と子供たちの幸福を常に心配していた男として現われている。家族の将来を彼は特に気にかけていたのである。彼はあるいは、亡命後に自らと家族とが背負った放浪生活を通して、カルロスの音楽的展開を妨げたのかもしれない。彼は息子の音楽的才能を高めてやり、音楽家になりたいという息子の希望も全く尊重したが、十分には評価できない音楽家としての将来の危険がはっきり見えたのである。それゆえに彼は、このように困難な時代にあって、カルロスが確実な職業を習得したらよいと主張したのである。カルロスのために、最終的には音楽の経歴を排除しなかったのである。

拙著において、こうしたやはり非常に興味深い話を詳細に説明した。父親が書いたとされる文章—これはラッセルによるエーリヒ・クライバーの伝記に引用されているが—、ならびに知人に対するカルロスの風刺的な所感のいくつかは、単純に誤って述べられたことも説明しておいた。エーリヒ・クライバーは熱心に手紙を書く人であった。彼は多くの風刺を用いて、巧みな文体に辛辣さを加えた。父を受け継いでその影響を受けたことは、ここにおいても感じられる。というのも、カルロスは若い頃すでに素晴らしい手紙を書いていたのである。父と息子の手紙のやり取りの様子、あるいはお互いについて他の人々と話した様子は、良好で、信頼に満ち、心が通い、相互の愛情に基づいた関係を思わせる。それでもその際、子どもの成長に関して理想が全く異なる時代にあって、父が非常に厳しい教育を息子に授け、衝動的に反応しえたということは疑問の余地がない。まさにカルロスのその後の青年期に、父子関係はたしかに衝突を免れなかった。しかしそうした衝突は、父がカルロスに大学で化学を学ぶように急き立てたとき、劇的に切迫することは全くなかった。その代わりカルロスは、大学で化学を学び始めるや否や、父の了解を得てそれをまた止めたのである。エーリヒ・クライバーは直ちに、息子が音楽を学べるように取り計らった。但し、さほど働く意志もなかったカルロスは、初めは怠惰に過ごした。カルロスは父に激しく良心に訴えられ、強いられて初めて、音楽家としての経歴を成功させるのに不可欠な野心を啓発したのであった。エーリヒ・クライバー

がどれほど素早く息子の意志に従い、どれほど息子の力になったか、すでにそれだけで、伝説の誤りが示されるのである。

認識として残るのは、カルロスが命令的な父に苦しんだのではなく、むしろ子ども時代に移転を繰り返すという負い目のある家庭生活で苦しみ続け、乳母や好かない寄宿舎に面倒を見られたことで苦しんだのである。まさにそこで彼は何年もの間、家族に守られていないことを寂しく思ったのである。こうした体験が、私的な生涯のみならず、彼の全生涯に決定的に影響を及ぼした。父は住所の定まらない、故郷のない生活を送り、楽譜台を転々とし、家族のための時間がない生活を無理に彼よりも先にしたが、彼はそのような生活を送りたくなかった。その間彼は、芸術の上では父をお手本として努力し、深い確信から父を自らの偶像に選び、父の志向性を彼自身の芸術の尺度にした。ここにおいて、時折及びがたく思われる父親像が浮かんでくる。そのうえその体験によって彼はすでに早くから、音楽の舞台の辛い面やその畏の結果を熟知していたのである。

カルロスの芸術的偶像としてエーリヒ・クライバーが果たした役割と父子関係とは、きわめて細かく分けて考えるべきであろう。私にとって重要だったのは、この伝説に満ちた間柄を、若き日のカルロス・クライバーのかなり知られざる生涯も含めて、今度こそ真実に、お決まりの見解を越えて、究明し描写することであった。そして今や、実際に多くのことが全く新たな光の中で現れれば、その時さらに明らかになるのは、人間として、また芸術家としてのカルロス・クライバーを理解するに至るには、彼の父のことや、彼の幼年時代や青年時代を通り過ぎる道はないということである。

リハーサルでの珍しい話

「私は当ての無い旅に出た。」カルロス・クライバーはこういうメモを、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団に残して驚かせた。彼が1982年12月、リハーサルの最中にオーケストラを見捨てて、弱らせ、怒らせた時のことである。そのため、いくつかのコンサートや、レコード、テレビの録音を伴う大規模な計画が挫折した。ロリン・マゼールが最後の最後に代役を務めはしたが、クライバーとフィルハーモニー管弦楽団との関係は、当分の間乱れた。この事件は、「取り消し屋」「逃げ去る人」というクライバーの評判を、センセーショナルに裏付けるように思われた。

1985年になってやっと、彼はフィルハーモニー管弦楽団のメンバーに再会した。彼が国立歌劇場で、「ラ・ボエーム」の連続公演を指揮した時のことである。クライバーがついに再び、フィルハーモニー管弦楽団の楽譜台に立ったのは、1988年のことであった。これが和解の証となった。

この事件の背景について詳細は、拙著において解説しておいた。しかしながらこの事件が起こった時、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団とのベートーヴェン交響曲第4番のリハーサルが、1982年12月9日、非公式に全曲録音されたことを私は知らなかった。この未公表の録音はもちろん、クライバーの伝記において私の解説を裏付ける興味深い証拠である。クライバーとオーケストラがどれほど不協和音で



あるかが明らかに聞こえ、認められるのである。フィルハーモニー管弦楽団は、クライバーの指揮に従ってその意志に応じることができず、その気もないのである。クライバーは1時間近くも、不満で怒りが込み上げる中、苦しんだ挙句、ついに（たぶんそうした感情が爆発する直前に）休憩することにするのである。それから逃げるつもりであった。

音声や画像でのこのようなりハーサル録音は、そのうちいくつかは現にすでに公表されたが、クライバーの作品および音楽に対する理解、彼の仕事のやり方、さらには彼の人柄の特性を、直接見抜く手立てとなる。

例えば、ドレスデンでのレコード練習のために、クライバーがリハーサル作業を行ったテープもある。しかもそれは、1973年の「魔弾の射手」、1980年から1981年にかけての「トリスタン物語」のものもある。もっとも私には、これらテープに耳を傾ける機会はなかった。さらにはるかに多くのそのような証拠となる物が、存在すると推定できる。したがって別の機会を期待してよい。

カメラの前のクライバー — 第3部

カルロス・クライバーとウィーン・フィルハーモニー管弦楽団。愛着というより、むしろ係わりがあったというべきものである。芸術的な最高潮の時期が20年以上にわたったが、いざこざと不和もあった。伝説となっている1981年のメキシコ旅行の時ほど、クライバーがオーケストラとともに幸福な日々を味わったことは、まずなかった。指揮者と楽団員の上々の気分がコンサートに反映していた。それ以前にもその後にも、このように洗練されたウィーンの人たちが、彼の指揮の下で、このように解放されて演奏したことは一度もなかった。その共同作業をよく知っている人々ですら、4月27日のグアナフアトでの2回目のコンサートの録音を手に入れたとき、その拍子と表現の豊かさには驚いた。

メキシコのテレビはそのコンサートを、参加者を知らずに一部の放映を延期していた。2004年にこの録音は米国に非公式に現れ、どちらかと言えば乏しい画質のDVDで出回った。この録音はベートーヴェンの交響曲第5番、序曲「コリオラン」、ならびに「雷雨の下で」のアンコール、およびシュトラウスの「こうもり」序曲を収録しており、カルロス・クライバーの指揮の特別な記録である。

さらに別の、まさに目を見張るクライバーの出演が、公式には目を見ずに放送された。すなわち1987年バイエルン国立管弦楽団とともに行った、イタリアのポンペイにおけるデレ・パナテネー・ポンペイアーネ音楽祭の最終コンサートである。オーケストラ理事のクルト・マイスターは、ブラームスの「第2の男」、モーツァルトの「リンツ」交響曲第36番ハ長調KV.425、およびヨハン・シュトラウスのアンコールを持ち出してクライバーを説得し、このコンサートを開催させたのである。このコンサートが事前の了解に反して、二人が知らずに、イタリア放送協会によって全イタリアで中継されたことで、二人とも腹を立てた。しかしそのようにして、このコンサートは映像と音において保存され、これまで未公表のまま、収集家仲間の間で広まっている。

かなり以前から、無認可版のみとはいえ、クライバーが1976年および1979年にスカラ座で行った「オテロ」と「ラ・ボエーム」の上演（イタリア放送協会）、ならびに、1981年にスカラ座のオーケストラとともに行った彼の日本での客演（NHK）については、これらの公式テレビ放送のDVDが手に入る。プラシド・ドミンゴ、ルチアーノ・パヴァロッチ、ミレッラ・フレーニのようなスターたちが、これらの演奏に共演した。さらにその他、1985年のウィーンの「ラ・ボエーム」の場面を収録した短いミュージック・ビデオがある。これは、ソニーBMGのDVD「マルチェル・プラーヴィー — お気に入りのオペラとオペラのお気に入り」で公表されている。

クライバーが日本でどのような熱狂を引き起こしたかをやはり証明するのが、1986年5月19日、バイエルン国立管弦楽団を伴って日本での客演旅行で行った最後のコンサートである。このコンサートは日本のテレビによって放送された。ベートーヴェン交響曲第4番および第7番、ならびに「こうもり」序曲の録音は、海賊版としてCDで公表された。但し、DVDでは未公表である。クライバーはコンサートホールの外では、国際的に地位が向上した後も、姿を認められることが稀であった。1980年と1994年、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団舞踏会に際して、クライバーが短時間指揮したが、この時のオーストリア放送協会の2つのカットを比較してみると面白い。さらにオーストリア放送協会の記録保管所に収められているものとして、1989年と1992年のニューイヤーコンサートの見本録音、および1994年1月19日、ウィーンで「学問と芸術のための名誉勲章」がクライバーに授与されたことに関する報告もある。比較的短い時間の見本カットも引き渡されている。例えば1978年にウィーンで演奏された「カルメン」、1983年にクライバーがシカゴで行った客演のカットである。

コンサートの最後の公式録音は、リュブリャナで行われたものである。クライバーが同地で1987年6月6日、妻シュタンカのために、コンカルイエフ大聖堂で、「ヨーロッパの文化月間」に際してスロベニア・フィルハーモニーを指揮した時のものである。予定表に載っていたのは、すでに別の会場で演奏されたものと同様、ベートーヴェンの序曲「コリオラン」、モーツァルトの交響曲第33番変ロ長調K.319、ブラームスの交響曲第4番である。このオーケストラの演奏文化は、ウィーンの人々の演奏文化には及ばなかったとしても、クライバーがこのオーケストラとともに燃え立たせた火と迫力は、人の心を引きつけるものである。

リハーサルへの立ち入りが、厳しく統制され制限されたにもかかわらず、クライバーの晩年において、ファンたちはリハーサルの場においても、秘かにビデオカメラをこっそり持ち込むことができた。たとえば、1989年と1990年のニューヨークのメトロポリタン歌劇場、1999年のグラン・カナリア島でのことである。1994年にウィーンで録音された「ばらの騎士」のリハーサルのテープは、すでに海賊版としてDVDで公表された。クライバーの指揮の流儀を非常に身近に見抜くことができるのが、1976年バイロイトでの録音である。最近ユーチューブで入手できるようになった。指揮者カメラによってオーケストラ席で録音されたこの「トリスタン」は、クライバーが人に見られていないと感じた時には、いかに内省的に、いや解放されて指揮したかを示すものである。

今後何年かすれば、さらに何らかの証拠が発見されるものと思われる。



カメラの前のクライバー — 第2部

1974年は、カルロス・クライバーの経歴において重要な年であった。バイロイトでは「トリスタンとイゾルデ」をもって、コヴェント・ガーデンでは「ばらの騎士」をもって、デビューしたばかりでなく、ヨーテボリとブラチスラヴァでは、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートも初めて指揮したのである。チェコスロバキアのテレビが、ブラチスラヴァでの演奏を1974年10月19日に録音するという事は、元来まったく予定されていなかった。しかし、ブラチスラヴァのホールが600席しかなかったので、この素晴らしい催しを全チェコスロバキアで中継したいという要望が、プラハから来たのである。メディア企業家レオ・キルヒが創設したドイツの会社ユニテルが、独占権を所有していたのである。白黒で直接中継放送の後、そのテープは消されることになった（幸い、コンサートの一部分は記録保管所に残った。すなわちシューベルトの交響曲第3番、ウェーバーの「魔弾の射手」序曲である）。コンサートがそもそもクライバーの明確な同意なしに放送局を通じて中継されたのは、当時オーケストラのマネージャーであったパウル・ヴァルター・フルストの巧妙な駆け引きのおかげである。そのようにして、当時むしろ偶然に、カルロス・クライバーとユニテル社との協力が始まったのである。その協力はその後、契約の確定をもって確認された。

その間、ユニテル社の最初の公式な制作に至るまで、まだ数年かかることになった。その後1979年に、ついにそこにたどり着いた。ミュンヘンでは、伝説となっているオットー・シェンク演出による「ばらの騎士」の上演が録音された。続いて1983年、アムステルダムでクライバーとロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団とのコンサート、1986年にはミュンヘンで「こうもり」、1984年にはウィーン国立歌劇場で「カルメン」、1991年と1993年にはウィーン・フィルハーモニー管弦楽団との2回のコンサート、1989年と1992年にはウィーンで2回のニューイヤーコンサート、1994年にはウィーンの「ばらの騎士」、最後に1996年には、ミュンヘンでバイエルン国立管弦楽団とともにレオ・キルヒのバースデーコンサートが催された。クライバーが「英雄の生涯」を初めて指揮した1993年のウィーンのコンサートを除いて、これら録音はDVDでも公表された。

クライバーの場合、彼をこの種の計画のために熱くさせるために、個人的な条件が決定的な役割を演ずることが何とそのように多かったことか。ユニテル社のプロデューサー、ホルント・H・ホールフェルトが彼の信頼する部下となり、のちに彼の友となった。多年にわたって彼は、この名指揮者の世話をして共に歩みながら、成功を収めたのである。しかし彼も、苦い後退を甘受しなければならなかった。1982年にクライバーは短期間に、野心的で高額なテレビ制作を2つ失敗させたのである。春にベルリンは、センセーションに熱を上げていた。すなわちクライバーの生まれ故郷の都市で、フィルハーモニー管弦楽団を伴って、長い間待ち望まれたデビューを飾ったのである。しかし、楽譜の資料をめぐる熾烈な争いの後、リハーサルの始まる少し前に、クライバーは激怒してベルリンの町を去ってしまった。シリーズ物のコンサート、レコードの録音、映画は水泡に帰ってしまったのである。その年の終わりには、ウィーンの人々も同じような目に遭った。すなわち、レコードおよび



映画の録音を伴ういくつかのコンサートを前にして、クライバーはウィーン・フィルハーモニー管弦楽団とリハーサルの間じゅう口論し、ロリン・マゼールが彼の代役を務めねばならなくなったのである。

カメラの前のクライバー — 第1部

1963年7月14日、大勢の音楽愛好家たちが、まだ誕生して間もない第2ドイツテレビで、ライン河畔ドイツ・オペラからの中継放送に魅惑されながら、その放送を追った。プログラムに載っていたのは「オッフェンバック三部作」である。すなわち、ジャック・オッフェンバックの3つの一幕劇で、レナート・モルド監督により、三連祭壇画仕立てにまとめられたものである。この上演の指揮者はカルロス・クライバーであった。これら3部の短いオペレッタ、「小さな魔笛」「カンテラの下で婚約」「チュリパタン島」をもって1962年6月、彼の経歴において最初の初演の成果を祝していた。1962年12月1日の晩、第2ドイツテレビによりデュッセルドルフで録音されたものは、この天才的な名指揮者の最も価値ある映像記録の1つとなり得るところであった。が、そうならなかった。というのも、80年代の初めに責任者の部長が、記録保管所に眠っていた録音を消すように命じたのである。そのような理由で、まずまずの出来の非公式な録音を除けば、あらゆる時代を通じて最も偉大な指揮者の1人の最初期の映像の証拠が、おそらくは永久に失われたままであろう。

カルロス・クライバーはすでにこの時点でかなり以前から、世界的名声を成すに至っていた。この全く無意味に思われる決定は、それだけ理解しがたいものである。やはり悲劇的なのは、クライバーは1981年を最後に、もはやスタジオでレコードを制作することが一度もなくなったのであるが、彼がカメラを嫌がったことである。幸いにも彼は、1970年、南ドイツ放送局のテレビシリーズ「仕事場に注目」に共演してほしいという説得に応じてくれた。「魔弾の射手」序曲と「こうもり」序曲のリハーサルの録音、および、それに続くこれら作品の上演とが相俟って、この1回限りの出来事で明らかになるのは、日常お決まりの仕事で硬くなったオーケストラでさえ鼓舞して、最高の演奏をさせる術を、彼が理解していた様である。「トリスタンとイゾルデ」の演奏など、同テレビのさらなる申し出は、彼は断った。シュトゥットガルト州立歌劇場の支配人、ヴァルター・エーリヒ・シェーファーの発案でなされたものだが、1971年の第2ドイツテレビの証拠資料においてのみ、— 短時間ではあるが — クライバーを目にする楽しみがまだあった。舞台のモニター越しに「ばらの騎士」を指揮しているところと、シェーファーと対談しているところが写されていたのである。まず言及するまでもないことだが、クライバーは、インタビューはもちろん、対談番組にも一生応じてくれなかった。

カルロス・クライバーに関して、彼の指揮者歴の浅かった頃の写真フィルムをさらに見つけるのは、難しいであろう。しかし、スナップ写真が1、2枚、記録保管所にまだ隠れているかもしれない。例えば、最近になって初めて知ったことだが、中部ドイツ放送局がクラシックの放送の中で、1973年にドレスデンでカール・マリア・フォン・ウェーバーのオペラ「魔弾の射手」序曲を、レコード制作するにあたり録音した際に、1度短時間、クライバーの姿をはっきり示していた。

カルロス・クライバーの遺産を映像でよく見れば、1974年より前の段階と、その後の段階について話題にせざるを得ない。というのも当時、永続的な契約を結ぶ前に、レオ・キルヒのメディア企業「ユニテル」との共同作業が始まったのである。1974年10月19日、ブラチスラヴァでのウィーン・フィルハーモニー管弦楽団とのデビュー・コンサートにおいて、この共同作業が最初に実を結んだのである。

これについて詳細は、「カメラの前のクライバー」第2部において、間もなくご紹介する。

カルロス・クライバーの遺産

カルロス・クライバー、この天賦の稀に見る指揮者のディスコグラフィ上の遺産がいかに小さいというのは、手痛いことである。コンサートホール、歌劇場、あるいはスタジオにおいてまで、自分の音楽上の理想や要求を実現できることを常に疑った指揮者であった。

70年代初め、華々しい世界的名声を博した時代に、彼はたしかに批判的に見えたが、しかし自分のコンサートおよびオペラのレパートリーを、絶えずレコード上で不朽のものにしようと意図しているように思われた。「魔弾の射手」「椿姫」「トリスタンとイゾルデ」「こうもり」および、ベートーベン、シューベルト、ブラームス、ドヴォルザークの何作かのオーケストラ作品の演奏によって彼は賞賛を受け、レコード史上に名を残すことになった。残念なことに、クライバーはすでに10年後に、彼にとってますます耐えがなくなっていた音楽業界における芸術上の制約に落胆して、スタジオでの短い経歴を終えたのである。

しかし幸いにも、彼はまだいずれにせよ、ビデオ、後にDVDで公表されたいくつかの生演奏において、一部分新しいレパートリーをもって指揮している様子を知ることができた。「生」、この言葉は、あるいはまだ明るみになるものがあるのでは、という期待を高める。ミュンヘンでのベートーベンの交響曲第6番および第7番、ボロディンの交響曲第2番、ウィーンでのDVD版「カルメン」、これらは一部分、まだクライバーが2004年に死ぬ前に認可したものだが、これら生録音の後、今度は1973年夏、ミュンヘンの音楽祭での「ばらの騎士」は、多くの音楽愛好家たちの心をより高鳴らせる。1972年4月、オットー・シェンクが監督した新演出の初演も、今まで20分間のカットでCDとして公表されただけではあるが、完全に手に入る。すでに1979年のミュンヘンでのシリーズ演奏が、少し元気を取り戻したウィーン国立歌劇場での1994年の上演と並んでDVD版で公表されたことで、これら証拠資料の魅力と意義が小さくはならない。1973年の素晴らしい音楽上の好機は、音響的にはそれ以前の無認可版と比較して、今回の方がより純粹に楽しめるが、さらに他のものを期待させて喜ばしい。

いくらかのものが、まだ記録保管所に眠っている。1968年、プラハの春の時期のシューマンのピアノ協奏曲、カール・フィリップ・エマヌエル・バッハのチェロ協奏曲変ロ長調、あるいは1966年、ジュネーブでのフランス語版「こうもり」である。3つの録音、すなわち、バイロイトでの「トリスタンとイゾルデ」、1970年のミュ

ンヘンでの「ヴォツェック」、1976年のスカラ座での「オテロ」、1979年ミラノでの「ラ・ボエーム」、あるいは公表直前にクライバーが取り下げたシュトラウスの「英雄の生涯」の録音は、公式には売りに出されることは一度もなかった。そのうえ、クライバーの私的な記録保管所に、どのような世に知られぬ宝があるいは隠れているか、知る由もない。というのも、ライン河畔ドイツオペラ劇場で1960年代初期、クライバーは複数の上演を録音させたのである。デュースブルクでの「リゴレット」などである。1966年、シュトゥットガルトでの「ヴォツェック」初演のテープも、クライバーは手にしていた。クライバーが成し遂げなかったものを思っても悲しい。しかし、彼は創造したものをもって、さらに音楽上の満足と期待とを産むのである。（アレクサンダー・ヴェルナー）